

りっしん

世の中こんなものとたかくくっていると意外なものに出逢って驚くものである。何事も目と心を開いて受容する心がけが必要である。

何やらわけ知りの宗教家めいた言い方をしてしまったが、漢字とお付き合いしていて、知っているつもりが、調べてみるとさらにその奥に隠されたものがあるなんてことはざらにある。またどうしてそんなことになってしまったのか不思議に思うこともある。これからその不思議なことのひとつをお話しようと思う。

右のような漢字を見たことはないだろうか。もちろん字典には載ってない。国字ではないかと思う。わたしも記憶にかすかに残っている程度なので、まちがっていたらごめんなさい。

蛸

どこかの地名、しかも古文でみたことがある。それは「蛸島」である。「たこじま」と読む。そう、いま通用している漢字で書けば「蛸島」なのである。ではどうしてこんな字形ができてしまったのか。

「小」は篆書では「𠂇」と書く。もともと小さな点を三つ書いて「ちいさい」という概念を表したと言う。この中央の線を見てほしい篆書でははねない。しかし、楷書で書く場合ははねなくてはならないのである。そういう約束事があるからだ。

「蛸」の傍の「肖」（旧字では「肖」）は「肉」と「小」との組み合わせで「血族の中で小さいもの」が元の意味。それが「骨格や肉づきが似る」に転じた。肖像画という言葉思い起こすと理解できる。

しかし、楷書こそ漢字の基準と考える人には放って置けない問題である。なぜなら蛸の傍の頭、つまり「𠂇」は縦棒がはねていない。楷書では「小」ははねるのである。ではこれをなんと称するか。「リッシン」なのである。

「心」は偏になると「忄」という形をとる。リッシン偏である。「忄」の中央の縦棒ははねない。楷書基準の人には「𠂇」と「忄」は同系にうつった。

お習字の先生が楷書を生徒に教えるのに「蜻」の傍の頭の部分は「小」と言ってはならない。それを聞いた生徒は思わず縦棒をはねてしまう。はねてはならない。はねさせないために「そこはリッシンだ」ということになる。

漢字の構成要素を呼ぶ名称で「リッシンペン」はある。だが、「リッシン」は字典には書いてない。「リッシン」は楷書の世界での専門用語だと思う。しかし、言葉と言うものは一度できてしまうと人格？が出来てしまう。

その昔、書記の若いお役人がいたとしよう。役人は町人の訴えを聞き文書に記していた。ふとその役人の筆が止まり、視線が宙に浮いたままになった。その動きを横にいた監督の上司が気にとめた。

「何か問題があるか」と聞いた。

「『たこ島』の『たこ』の字がどうしても書けません」

「なんだ、しょうのない奴だ。いいか蜻の偏は虫、傍はリッシンに肉月だ」

「リッシン？」

役人は聞いたことのない言葉を聞いた。理解できなかった。でも『リッシンて何ですか。』と聞く再び聞く勇気がなかった。

「リッシンか、リッシン、リッシン、たつところ、立心。そうか」

ひとりそうつぶやいて書いた、「**蜻**」と。

この経緯は言うておくが私の推測である。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000